

家のはなし (海外の住宅事情) ～その 4～

今回の家のはなしは、欧州ギリシャの住居です。

オリンピック前夜の住居事情

南アからギリシャに転勤した 2002 年 4 月は、アテネオリンピックを 2 年後に控えた時期。同年 1 月には、欧州で域内統一通貨であるユーロが導入され、ギリシャも以前の自国通貨ドラクマからユーロに変わった直後でした。ユーロの導入によって、ギリシャでは貨幣価値の高いユーロに引っ張られるように物価高騰の波がじわじわと押し寄せ、アテネ市内の賃貸住宅市場もその影響を受け始めていました。

アテネ市内での家探しは不動産会社による仲介でしたが、南アと同様に不動産会社の仕事は物件を仲介するだけで、オーナーとの具体的な交渉には関与しません。家探しでハードルになったのは言葉の壁で、不動産会社の担当はギリシャ語しか話しませんし、物件のオーナーも多くはギリシャ語だけです。それまでの在勤地では、自分自身で不動産会社の担当と直接折衝を行い、家の内覧にも第三者が同伴することはありませんでした。ギリシャ語だけということになるとそういうわけにもいかず、大使館の現地職員のサポートも得ながらの家探しとなりました。

着任から約 1 か月の間に 10 数軒ほどの住居を内覧しましたが、正直なところ要望に見合う物件は殆どありませんでした。以前、このコラムで“海外生活の立ち上げ”について書いた際に住居探しについて触れたことがありますが、海外では賃貸住居市場に大きな動きがあるのは 7 月ごろの時期で、これは外国の大使館や企業の人事異動の時期と関連があるようです。アテネで家探しを行っていた 4 月は賃貸物件が払底しており、ろくな物件しか提供されないストレスから不動産会社を変えたこともありましたが、結局は人事異動の時期でもないことから物件の絶対数が限られており、1 つの物件を複数の不動産会社が手持ちの物件として扱っているため、不動産会社が変わっても同じ物件を見せられるということが何度もありました。住居探しが難航していたのは、子供たちが通学する予定のインターナショナルスクール至近に立地を絞っていたことも理由でしたが…

住居決定

ともあれ、粘りに粘った結果、アテネ北部のキフィシア地区にあった学校から徒歩2~3分の至近距離にアパートを探し当て入居しました。4階建ての建物で、表通りから10mほど入ったところにオートロックの入り口があり、G階からエレベータで1階上がったフロアの1室で、広さは160㎡で3ベッドルーム、2バスルームの家具なしアパートでした。室内は、同じ家具なし住居とはいえ北米や南アとは違い、キッチンですら何の設備も付帯されていない全くスカスカの状態でした。建物が自体古びており、室内も全体的に古く手入れもされていない印象。部屋のレイアウトは、北側に面してL字型のリビングダイニングと広めのテラス、フローリング床のリビングの東側の壁に暖炉、西側の大理石張りの廊下を隔ててフローリングのベッドルームが3室、バスルーム2室、ダイニングに隣接して西側にキッチンと3畳程度の物置きというのが全体の様子。ダイニング部分には収納式の引き戸があり、来客時にはベッドルームとしての活用が可能でした。

家賃は1,700ユーロ、前の住人の家賃は40万ドラクマ（約1,000ユーロ）と聞いていたので、住居のグレードからすると尋常ならざる高額設定でしたが、これはユーロ導入による物価の急騰、さらにオリンピックを2年後に控えて賃貸市況が売り手市場となり高騰し始めていたので止むを得なかったかも知れません。ダメ元で家賃交渉を試みましたが、こちらが子供たちの学校に近い物件を探していたことから、オーナーには足元を見透かされたのでしょうか、残念ながら値下げには応じてもらえませんでした（この異常ともいえる賃貸住宅相場は、後年のギリシャ危機によってかなり下落したと聞いています）。ちなみに、賃貸契約書が二本立てになっていたことは以前にも触れましたが、アパートのオーナーは同じ建物の最上階に居住しており、毎月の家賃支払いはオーナーの要求に従って現金での支払いでした。21世紀のご時世に家賃を現金払いとは恐れ入りましたが、想像するに、銀行振り込みや小切手では銀行に記録が残って税金の申告に不都合とオーナーが考えていたからでしょう。

とにかく、入居時にベッド、ソファ、ダイニングセットなどの家具類、キッチンの家電製品として冷蔵庫、調理用グリル、食洗器、洗濯機等を調達しましたが、車の購入に加えてこれらの出費、さらには子供たちの学費全額前払いなどで財布の中身は一時的に底をついてしまいました。

アパート生活の日常

ギリシャといえば、真っ先に紺碧の空に輝く太陽、真っ青なエーゲ海に浮かぶ島々といった夏を連想させられますが、アテネの夏はまさにそのイメージどおりでガラガラと太陽が照り付け気温が40℃近くまで上昇します。夏季は5月下旬から9月ごろまでと

長く、住居の造りも同じ地中海に面したイスラエルと同様に開口部の広い夏向きの住居で、直射日光を避けるために1日の中で最も長い時間を過ごすリビングを北東側に配置している住居も多く見られました。我が家の場合も、リビングダイニングとテラスは北側に面して過ごしやすい間取りでした。一方で、西向きに配置されていたキッチンから差し込む直射日光がきつく、オーナーに日除けのシェードを設置してもらいました。それでも、日照時間の長い真夏は夕方7時近くまで西日が差し込み、キッチン内の温度が上昇して蒸し風呂のような暑さに。当時、家内は暑くて夕食が作れないと夏の間ずっとぼやき通しでした。

一方、アテネの冬場は1、2月ごろの最低気温は5~6℃まで下がりますので、夏向きの家は過ごしにくいと言えます。当初は、単なる飾りと考えていたリビングの暖炉でしたが、冬の到来とともに暖炉の恩恵にあずかることになりました。暖炉の燃料は薪で、郊外の販売店で調達していましたが、ステーションワゴンの荷室にぎっしり詰め込んで約2か月分の量。薪はテラスの片隅に積み上げて保管、シーズンに2度調達して冬を過ごしました。ギリシャでは、週末の日曜日はほとんどの商店が休みになりますので、特に冬場、日曜日の午後はほとんど自宅で過ごしていましたが、赤々と燃える暖炉の日を眺めながらゆったりとコーヒーを飲むのは至福の時間でした。

オリンピック前1年間には、この住居めがけて日本から親族や友人の訪問が何度もあり、その都度ダイニングルームは来客の寝室に早変わり、何度もダブルベッドを組み立てては分解することを繰り返しましたが、広い海外の住居だからこそ来客を迎えることができたのだと思うと、ことさらに当時が懐かしく思い出されます。

つづく

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。